龜井勝一郎全集

第七巻

講談社

亀井勝一郎全集　第七巻

昭和四十六年八月二十日　第一刷発行
昭和四十九年二月二十日　第二刷発行

定価　二三〇〇円

著者　亀井勝一郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井裟子　昭和四十六年

Printed in Japan

0395-135075-2253 (1)　(文1)

龜井勝一郎全集　第七巻

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第七卷　目次

捨身飼虎

捨身飼虎……一
耶蘇伝……二四
生命のあけぼの……四〇
観世音菩薩普門品……四八
一、漂泊と遊戯……四八
二、祈りについて……五三
三、仇敵の間に立ちて……五八
四、煩悩即菩提……六三
五、大生命の流転……六九

親鸞

発心……七七
第一章　邂逅……七七
第二章　往相と還相……八三
第三章　伝説……九一
夢告……九七
第四章　転身……九七
第五章　信と行……一〇六
流転……一二四

第六章　凡夫の自覚……二四
第七章　悪人往生……三二
聞　法……二六
第八章　言葉と音声……三六
第九章　仏々相念……二三三
第十章　終の栖……二四〇
如　来……二四五
第十一章　自然法爾……二四五
第十二章　臨終……二四七
後　記……二五〇

聖徳太子

第一章　金剌宮……一五七
文　明……一五七
群卿論……一六四
大伴金村……一六四
物部尾輿……一六八
蘇我稲目……一八〇
第二章　橘宮……一八四
降　誕……一八四
教　育……一八九
悪　夢……一九五
永遠に救はれざるもの……二〇六
第三章　少治田宮……二一一
摂　政……二一一
仏……二一四
任　那……二二六
人　間……二三〇
第四章　斑鳩宮……二三八
菩薩の夢……二三八

祭宴……二五〇
旅人……二五四
菩薩の疾……二五七
第五章　天寿国……二六六
甍去……二六六
危機……二七〇
殉難……二七六
後記……二八四

日本の智慧

1

無分別の法……二八九
解決はありうるか……二九三
真理を求めるには……二九六
罪の惑はし……二九八
生きとし生けるものへの愛……三〇一
幸福について……三〇六
善人と悪人……三〇九
人を慰めるには……三一三
宗教的ふるまひのこと……三一七
惰性との戦ひ……三二二

2

自由とは……三二六
消極性のもつ積極性について……三二九
友と酒の戒め……三三三
色ごのみ……三三八

節度の美学……三四一
三つの初心……三四五
不易流行……三四七
無用の用といふこと……三五一
化物について……三五五
もののあはれを知るとは……三五七
後記……三六一

西洋の智慧

1

モーゼの十誡……三六七
空の空なるかな……三七三
愛……三七五
荒野の修業……三七七
空の鳥を見よ……三八一
人間は人間を裁きうるか……三八五
パウロの叫び……三九九
怯懦の群……三九一

2

ソクラテスの智慧と死……三九四
エロス……三九九
死と快楽……四〇一
人間の空虚なること……四〇四
ゲーテとの対話より……四〇八
信仰と性愛の戦ひ……四一七

民衆の阿片……四三三
ヴァレリイ一家言より……四三七

拾遺

邂逅と謝念……四三七
日本大乗……四四一
群萌……四四六
親鸞年譜……四五一
序説——太子伝について——……四五五

後記……四三一

信仰の迷妄と明晰について……四六九
上代思想家の悲劇……四七六
仏教と人間……四八八
宗教と芸術……四九八

解題……五一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

捨身飼虎

捨身飼虎

一

昔々ヒマラヤ山脈の西の麓に、無量宝樹といふ国があつた。インダス河の水源が此の地方に発してゐる。幽谷にめぐまれた美しい山国で、到るところ谿流がはしり、清い泉が湧き出てゐた。

国王の名を大車と云つた。彼は巨富と勇猛な軍隊をもつてゐたが、聡明な男だつたので、あらゆる施設をつくして国民の幸福をはかつた。国内には平和がみなぎつてゐた。大車は多くの侍従をひきつれ、悠然と巨象にまたがりながら、村から村を訪れ、民の生業にいそしむのを眺めては喜んだ。さうでないときは独り深山にわけ入つて、様々の鳥獣の叫びをききつゝ、ぼんやりしてゐるのが好きだつた。そんな折の彼は、黄金色の肌に純白の衣をまきつけ、白い顎ひげを風になぶらせながら口もとに微笑をうかべてゐた。

彼には三人の王子があつて、長子を摩訶波羅、次子を摩訶提婆、末子を摩訶薩埵とよんだ。いづれも金色の皮膚と漆黒の髪と薔薇色の唇をもつた逞しい青年達である。とりわけ末子の薩埵は端麗な容貌をもつてゐたので、成長するにつれて国民愛敬の的となり、みなこぞつてこの王子をみることを楽つた。彼らは谿流で水泳して柔軟な肉体をつくりあげた。またヒマラヤ山麓を漂泊してくる多くの修道者達を招いて仏陀の教を乞うた。

或る日大車は、王子達と侍従を伴ひ、森林を賞美するために山奥へ出かけた。三人は仲のよい兄弟だつたので、父王遊行の折はいつも父や侍従達からこつそり離れ、別なところで彼らだけで議論したり冗談を言つたりすることを好んだ。この日もさうした。彼らの胸には、これから国を治めて行くため、また自分達が生きて行く為の様々の問題があつた。それをお互に語りあひたかつたのである。

国は富み、平和もあるが、仏陀の教は何かもつとその先に真実があることを示してゐるやうに思へた。王子達は何ものも恐れなかつたが、修道者達の澄みわたつた眼光が、いつも気にかゝる。柔和な言葉の底に、鋭い非難があるやうに感じられる。何故こんなものが流れこんで来たのだらうと忌々しく思ふこともあつたが、無視するにはあまりに強い真実のひ

びきがあつた。――先頭の象にまたがつてゐた長子の波羅は、伝へきいた様々の言葉を思ひ浮べてみた。「生者は必ず滅びる」と或る修道者は言つた。「一切衆生は、山川草木禽獣悉く大自然の生命を呼吸し、神の性を与へられてゐる」といふ言葉もあつた。「大悲心は自分の身を一粒の種子のごとく自然の裡に投ずるだらう」「一切を棄てよ」と他の修道者は説いた。彼ら三人の王子は、これらの教にどう対すべきか迷つてゐたのである。

摩訶波羅は後に従つてくる弟達を顧みながら、ふと自分の本心を言つてみたくなつた。

「提婆よ、薩埵よ、修道者達の言ふことはみなほんたうだらうね。立派な教だと思ふよ。しかし、ちと無理なところがある。この無量宝樹にもし俺達王族がゐなかつたら、人々はどうなるだらう。俺達が一切を棄てて漂泊に出たら、人々もまた従ふだらうか。いや、そんなことは考へられない。俺達の棄てたものを彼らは奪ふだらう。もつとわるい野心家が出てきて国をとるだらう。俺はいまのまゝでいゝと思ふ。父上は嘗て一度も苛斂誅求をなさらなかつた。いつでも第一に国民のことを考へておいでになる。父上は仏法にあまり熱心ではないが、行ふところは法にかなつてゐるではないか。自分の運命を忠実に生きようとしておいでになるのだ。その上に一切を棄てろなどと説教するのは少し傲慢だね。物質や煩悩に執着するのはいゝことではあるまいが、根こそぎ断ち切るなんて、出来つこないぢやないか。羅漢さんのやうに、頭や顔がデコボコになるまで難行苦行するのは、第一みつともないぜ。いま与へられたところで最善をつくせばいゝのだ。救ひのことは考へないで、滅びるときはいさぎよく滅んで行かう。俺はさう思つてゐる。いくら苦行してみても、この世に救ひがあるかどうか、誰がわかるものか。さう思はないかい？」

「兄さんは落着いてゐるね」と提婆はいつもの元気のいゝ声で答へた。そして自分の考へを述べた。

「父上の政治はたしかに立派さ。僕もその点は安心してゐる。兄さんの言ふやうにこの天命を素直に継いで行けばいゝのかもしれない。救ひなど此の世にないのかもしれない。しかし僕はそれで心が落着くわけにゆかないのだ。もつと先に何かありさうに思はれる。一切衆生がみな自然の子なら、みなが無所有の境で、嬉々と暮せるもう一段高い国がありさうに思はれるのだよ。そこへ行くための捨身を修道者達は説いてゐるのだらう。僕にはそれがわかる。自分の身がどうならうとかまはない。自分の身は惜しくない。たゞどうしても突破出来さうに思はれないのは、愛するものとの別離だ。王城にゐる母上や妻を棄ててまで求道の旅に出ることは出来ないね。結局、僕の苦痛は別離の苦痛だ。わが国の財宝も強兵も

いつかは滅びるときが来るだらう。健康な奴もまもなく死んでしまふだらう。しかしどんな時が来ても、愛する者と別れる悲しみはなくならないだらうよ。」

「それやさうさ。黙つてその苦しみに堪へて行くより仕方があるまい。泣きわめいても同じことだ。誰だつてさうして別れて行くのだ。死ぬときは孤独で何ものもないだらう。だから俺は考へるよ。人間の最後が一様に寂しいものなら、生きてゐる束の間だけでも歓楽の花で飾るがよいとね。それも空しいだらうが、この世とはさういふものとしか思はれないのだ。人間に出来さうもないことはしない方がいゝのだ。」

「だけどね、別離の苦しみさへ和ぐやうな境地が、絶対にないとは云へないよ。僕にはないけれど、心の修業を積んだ人の中にはきつとあるかもしれない。与へられた地上の仕事に全力を傾けたら、素直に天に帰する刹那はきつとあるにちがひないよ。仏陀はさうだつた。さういふ不思議な人もゐるにはゐるのだからね。」

「さあ、どうかなあ。仏陀なども、生死を超越出来た人といふよりも、生死の苦を堪へ忍ぶ天才だつたと俺には思はれるね。そんな気がするよ。苦を面にあらはさずに、平和さうな顔をしてゐただけだぜ。きつと。この地上の仕事など、どんなに全力を傾けたつて、どうにもならないぢやないか。素直に天に帰するなんて、多分途中であきらめた奴だらうよ。仏陀などは、あきらめきれなくて、じつと眼を半眼にみひらいて痛我慢してゐたのだぜ。何のためにあんなに頑張つてみたんだ。少し滑稽だよ。」

「兄さんにはどうも閉口だ。妙に悟つてゐるんだなあ。いまに満足してゐられれば人間は落着くよ。」

「満足なんぞしてゐるものか。たくさんの侍女にかこまれてゐるときだつて、かくべつ嬉しくもない。あゝいふものはだんだん飽きてしまふものだ。あとはたゞ満足さうにして、ちよつと笑つてみたりしてゐるだけだ。さうすると侍従も国民も満足さうに喜んでくれるからね。父上が言つたぜ。これが王者たるものの義務だつてさ。」

波羅はさう言つて、自分でもちよつと満足さうに笑つた。提婆も仕方なしに笑つた。森林には凄い静寂が支配してゐて、彼らの笑ひ声を反響した。末子の薩埵は、一番うしろの象に乗つたまゝ、兄達の会話を熱心にきいてゐたが、このとき眼を輝かせながら、ふいに大声で叫んだ。

「僕は自分が生きてゐるのか死んでゐるのかわからないよ。たゞ生きたい！　これが生命だと自分ではつきり肯けるやうな、すばらしい刹那を生きてみたい！　僕の考へてゐることはそれだけだ。」

兄達は、薩埵の激しい口調に驚いて、一瞬彼の顔をみつめてゐた。いつもの癖がはじまつたと思つた。彼らは薩埵を心

から愛してゐた。柔和で無口であるが、修道者の教をきくときの燃ゆるやうな眼差を彼らは知つてゐた。薩埵の言葉は、いつも辻褄があはなくて、独り考へこんだことを奔流のやうに吐き出すくせがあつた。しかしどこかに人の急所をつく、魂一杯の叫びがこもつてゐて、人を辟易させる。いまもさうである。薩埵の声をきくと、自分達の会話が何か言葉の戯れのやうに思へてならなかつた。

波羅は以前、弟の性急な情熱をみて、「すばらしい刹那は恋愛や情慾の裡にある」と語つたことがあつた。その言葉の裏には、漸く少年期を脱したばかりの弟の若さをあはれに思ふひゞきがこもつてゐた。さういふ経験のない薩埵も、自分の方を凝視る侍女達の熱した瞳は心の底ふかくやきつけられてゐたので、兄の言ふことはほんたうだらうとは思つてゐた。それを悪いとも考へなかつた。たゞ彼は、兄達の真実をそのまゝ自分も模倣したくなかつた。自分は自分の道を歩いて、兄達の前に、かういふ美しい真実もあると誇つてみたかつたのである。仏陀の教は彼の心をとらへた。一切衆生が悉く愛されてあるものなら、一本の草木の前に身を捨ててもいい筈だ。別離は悲しく苦しい、堪へられぬことかもしれぬ。が、人間はいつか死ぬだらう。それを待ちつゝ、一日一日の歓楽や議論に過すよりも、彼はいつそその「死」に挑みかゝつて行きたかつた。自分の勇猛を試みたかつた。これが生命だと自分にはつきり納得出来る刹那を欲した。

「僕の声は、大きいね！」

大声で叫んだあとで、薩埵がさう言つて恥しさうな微笑を浮べたので、今度は三人が声をそろへて笑つた。波羅も提婆もすぐ愉快な気持になつた。鬱蒼たる大樹は静まりかへつて、梢の頂だけ陽の光をうけてそよいでゐた。象は長い鼻をぶらぶらさせながらじつとしてゐる。遠くに侍従達が吹き鳴らす笛の音が聞えて、それが剽軽なひゞきを伝へてくる。

「今が幸福なのかもしれぬ、この刹那だけが永遠であつてくれればいゝのだが」と波羅は心につぶやいた。

二

幾日か経て大車は再び三人の王子を伴ひ谿谷の賞美に出かけた。途中で三人はいつものやうに列から離れた。象を追ひ帰し、彼らは谿谷の奥の方へ、断崖に沿うて歩いて行つた。やがて大きな竹林に出遭つたので、そこで休息することにした。そこは数丈の竹が密生し、日の光りもかすかに洩れてくるばかりで、時折ぞつとするやうな冷い風が吹いてゐる。鳥獣の異様な啼声が鋭くひゞいてきて、深い神秘な気配があたりにたちこめてゐた。三人の王子は薄気味わるくなつて、急に口をつぐんでしまつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com